

## 普及技術

平成25年度

水稲育苗ハウスを活用したいちじく「柵井ドーフィン」のコンテナ栽培技術			
[要約] <u>いちじく「柵井ドーフィン」を、水稲育苗ハウスでモミ殻を培地としたコンテナ栽培</u> をすることにより、定植1年目から収穫可能で、2年目以降は300kg/a以上の高い収量が得られる。			
農業総合研究所園芸研究センター	環境・施設科	連絡先	TEL 0254-27-5555 FAX 0254-27-2659

## [背景・ねらい]

近年、水稲育苗ハウスを有効活用するためにコンテナ栽培の導入が進められているが、導入品目は限定されている。そこで、栽培管理が比較的容易で1年目から収穫可能ないちじくのコンテナ栽培技術を開発し、施設の有効利用と複合経営のためのメニュー化を図る。

## [成果の内容・特徴]

- 3月初旬に鹿沼土を詰めた12cmポットへ1芽に調整した穂木を挿し木する(図1A)。
- 5月下旬～6月上旬に十分に浸水処理したもみ殻を約30L入れた球根輸入用コンテナ(60cm×40cm×25cm)に2株ずつ定植し、その表面に浸水処理したヤシ殻や堆肥などを約2L敷く(図1B、C)。
- 給液用の点滴チューブを3本設置し、側面まで白黒マルチを被覆する(図1C、D)。
- 1液式の養液栽培用肥料を使用し、定植または搬入直後はEC2.0dS/mとする。定期的に排液ECを測定し、排液ECが給液ECを超えたら段階的に0.7dS/mまで下げる。
- 培養液供給量は、排液率30%を目安に生育ステージや天候に応じて調節し、1回あたりの供給量は1L/コンテナとして1日あたり3.0～9.0L/株程度とする(図2)。
- 収穫期間は8月中旬から12月初旬で(図1E)、1年目には180kg/a、2～5年目は300kg/aの収量が得られ(図3)、品質は慣行栽培と同等である。
- 落葉後の冬期間に新梢を10cm程度残して切り戻し(図1F)、水稲育苗時には施設外へ搬出し、培地が乾かないように適時かん水する。
- 2年目以降は発芽時にIB化成肥料を施用(窒素で4g/株)し、水稲の育苗が終わったハウスへ搬入し栽培を行う。

## [成果の活用面・留意点]

- 必要な資材は液肥混入器、タイマー、ポンプ、水量計などで1施設当たりの導入経費は13万円程度である。
- 〇社の1液式養液栽培用肥料を用いた結果であり、6年生以降の株については検討中。
- 導入に当たっては養液栽培基準に適合した水質の水を確保する。
- 詳細については農業総合研究所ホームページに栽培マニュアルを掲載する予定。

[具体的データ]



図1 栽培の流れ

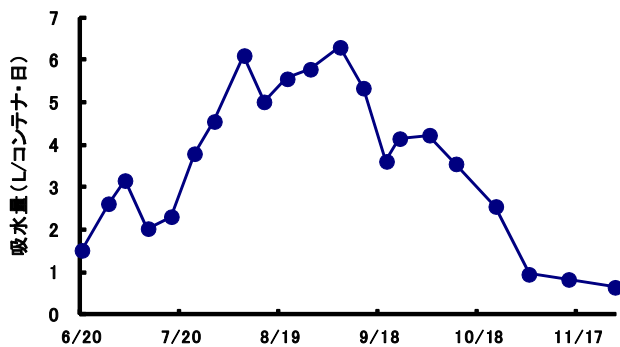


図2 吸水量の推移(2012年、4年生株)

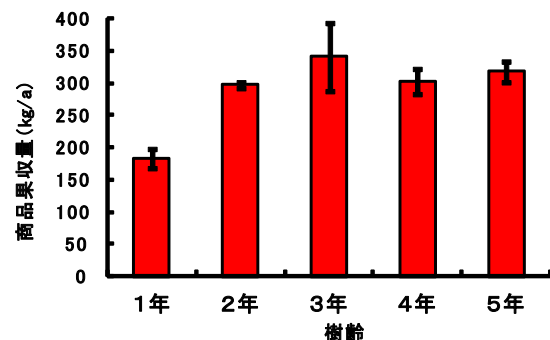


図3 樹齢の違いが商品果収量に及ぼす影響(2012年)

[その他]

研究課題名：水稲育苗ハウスで高収益、早期に収穫できる果樹栽培技術の開発

予算区分：県単特別

研究期間：平成22～24年度

発表論文等：なし